※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

巻頭言

複合的統合によるビジネス機会

渡　辺　勇　二*

1）はじめに

知的財産基本法が施行されて10年が経過し，国家の成長戦略に寄与する為の更なる「最先端の知財立国」を目指す国内の環境整備が，着々と各方面で進められていることと思います。

ここ数年におけるIT技術とりわけ通信技術の躍進により，個人も企業も，充実したデータベースを手軽に利用できる状況になりました。このような環境は，特許をはじめとする知的財産権の管理運用について，出願や検索などの実務面での高速化や効率化に，更に貢献していくものと期待しています。

そのような環境下，本誌（No.748）の特集記事（441頁）に，「全世界で大量の特許出願をして常に出願件数のランキング上位を占める日本企業ですが，なぜ膨大な特許を保有しているにも関わらず，ビジネスで負けるのでしょうか。」との記載があり，従来からの「知財マネジメント」の変革が必要であるとの，大変興味ある指摘がなされていました。

各企業が置かれている市場や立場はそれぞれ異なりますし，全体を俯瞰しての見方ではありませんが，当社の展開を基に，私なりに感じましたところを述べてみたいと思います。

2）周辺技術

当社は，戦後復興が本格化していく1955年５月，東京の下町深川富岡町に産声をあげました。当時路上に落ちていた多くの油漏れを無くすことで，日本の国力復興に貢献したいという創業者の強い思いから，液状ガスケット材を世に送り出しました。以後，自動車，電機をはじめとする多くの産業に，シール・接着を目的とする，生産材料としての精密化学製品を供給して参りました。

その間，日本企業の国際化に呼応して，1970年にロスアンゼルス駐在員事務所を皮切りに海外拠点展開を行い，現在は23か国に165拠点（内13生産拠点）を展開しています。

当社の製品開発のスタイルのひとつに，お客様の主たる技術を支える為の生産材料の開発を，お客様の設計段階から一緒に開発し，量産供給体制を整えるということがあります。当社の技術は，主たる技術を支える周辺技術だという位置付けですが，主たる技術か周辺技術か，どちらの方が重要かということではありません。双方の技術を「活かす」為に，相互の技術は必要不可欠な関係にあるものだと当社は認識しています。

このようにして生まれた我々の技術は，固有の技術として当社単独での特許出願により，技術を確立していきますが，このような開発スタイルのため，様々な分野のお客様と共同出願することもあり

* 株式会社スリーボンド　常務取締役　Yuji WATANABE

※本文の複製、転載、改変、再配布を禁止します。

ます。また，材料に関する特許は当社が出願し，それをお客様の技術に組み入れることで生まれる応用技術を，共同の成果とする場合もあります。

3）目に見える技術

特許は発明者の権利を保護する為，明確な記述によって特定され，もって第三者への強い対抗力を有しています。それは言い換えれば「目に見える技術」だということだと思います。

ハリウッド映画「2001年宇宙の旅」の中で，猿人が骨を道具として使った場面が印象に残っています。我々人類が高度な文明を築いて行く上で，道具の存在が極めて重要であったことを，象徴的に描いている場面だと思います。

目に見える道具は自身の目にも見え，周りの人々が利用しようと思えば，手に入れることができるものだと思います。しかしながら，その猿人が道具として握った骨の，どの部分をどのように持つか，どのような動きをさせるか，などは一見しただけではなかなか他の猿人は分からないと思います。

骨という目に見える道具を，効果のある使い方をするには，目に見えない工夫や仕掛け，いわゆる使うための「知恵」が必要だと思います。骨そのものを保有するだけでは，骨に戻ってしまい，道具として活かされないのだと思います。

特許も企業にとっては大変有用な道具ですが，保有するだけでは活かされないのだと思います。どのように周辺を支える「知恵」と一緒にして「活かす」かが重要だと思います。

4）複合的統合

特許権は排他的権利であり，絶対的な競争排除を引き起こしますが，同時にその有する公開性が次の技術を啓発し，更なる技術革新をもたらすものと思います。

一方で，明示することが困難であり，公開できない技術があることも事実です。一企業としては，眼前の特定の技術開発競争を避けて通ることはできませんが，市場も企業も単独での技術優位が，ビジネスの成功に寄与するケースは，次第に限られていくのではないかと思います。

かつてAMラジオしか搭載されていなかった自動車は，カーナビゲーションが搭載され，スマートフォンによりその自動車の状況も車外で把握できるようになり，自動車には専用の秘書が乗っているかのようになりました。

異業種交流のレベルではなく，様々な分野での，一見無関係と思われる技術が，複合的に統合され，新しい価値を生み出していく状況は，さらに加速していくと思います。

ハリウッド映画と比較してよく言われることですが，「日本には，映画作りに必要な，精細で優秀な技を持つ職人も多く，感性あふれる監督も多いが，プロデューサーが少ない。」

当社は様々な分野のお客様の開発段階から，一緒に製品開発を行うことを通じて，お客様の技術を「活かす」技術を開発することに専念してきました。お客様がプロデューサーとなり，その複合的視野に導かれ，我々もそれに適合する技術を生み出し，一緒にビジネスを成立させることができたものと思っています。

「目に見える道具」を十分に活用する為に，様々な分野の方々と共に「知恵」を結集し，「ビジネスを成立させていく」ことに繋がる機会を生み出す，「最先端の知財立国」をリードする日本のプロデューサーが，多く輩出されることを期待して止みません。

今後とも日本知的財産協会が多方面での啓発にご尽力され，会員企業の更なる発展向上に向け，引き続き力強い牽引役となられますことを願いまして拙文の結びといたします。